

蛇くひ

泉鏡花作

全一章

西は神通川の堤防を以て劃とし、東は町盡の樹林境を為し、南は海に到りて盡き、北は立山の麓に終る。此間十里見通しの原野にして、山水の佳景いふべからず。其川幅最も廣く、町に最も近く、野の稍狭き處を郷屋敷田畝と稱へて、雲雀の巢獵、野草摘に妙なり。

此處往時北越名代の健兒、佐々成政の別業の舊跡にして、今も残れる築山は小富士と呼びぬ。

傍に一本、榎を植ゆ、年經る大樹鬱蒼と繁茂りて、晝も梟の威を扶けて鴉に峙を貸さず、夜陰人靜まりて一陣の風枝を拂へば、愁然たる聲ありておうおうと唸くが如し。

されば爰に忌むべく恐るべきを（おう）に譬へて、

假に（應）といへる一種異様の乞食ありて、郷屋敷田畝を徘徊す。驚破「應」來れりと叫ぶ時は、幼童婦女子は遁隠れ、孩兒も怖れて夜泣を止む。

「應」は普通の乞食と齊しく、見る影もなき貧民なり。頭髮は婦人のごとく長く伸びたるを結ばず、肩より垂れて踵に到る。跣足にて行歩甚だ健なり。容顏隱險の氣を帯び、耳敏く、氣鋭し。各自一條の杖を携へ、續々市街に入込みて、軒毎に食を求め、與へざれば敢て去らず。

初めは人皆懊惱に堪へずして、渠等を罵り懲らせしに、争はずして一旦は去れども、翌日驚く可き報怨を蒙りてより後は、見す／＼米錢を奪はれけり。

渠等は己を拒みたる者の店前に集り、或は戸口に立並び、御繁昌の旦那客にして食を與へず、餓えて食ふものゝ何なるかを見よ、と叫げて、袂を探ぐれば畝々と這出づる蛇を掴みて、引斷りては舌鼓して咀嚼し、疊とも言はず、敷居ともいはず、吐出しては舐る態は、ちらと見るだに嘔吐を催し、心弱き婦

女子は後三日の食を廢して、病を得ざるは寡なきなり、凡そ幾百戸の富家、豪商、一度づつ、此復讐に遭はざるはなかりし。渠等の無頼なる幾度も此舉動を繰返すに憚る者ならねど、衆は其乞ふが随意に若干の物品を投じて、其惡戯を演ぜざらむことを謝するを以て、蛇食の藝は暫時休憩を啖き居る。

渠等米錢を恵まるゝ時は、「お月様幾つ」と一齊に叫び連れ、後をも見ずして走り去るなり。ただ貧家を訪ふことなし。去りながら外面に窮乏を粧ひ、囊中却て温なる連中には、頭から此一藝を演じて、其家の女房娘等が色を變ずるにあらざれば、決して止むることなし。法はいまだ一個人の食物に干渉せざる以上は、警吏も施すべき手段なきを如何せむ。

蝗、蛙、蛭、蝥の如きは、最も喜びて食する物とす。語を寄す（應）よ、願はくはせめて糞汁を啜ることを休めよ。もし之を味噌汁と洒落て用ゐらるゝに至らば、十萬石の稻は恐らく立處に枯れむ。

最も饗膳なりとて珍重するは、長蟲の茹初なり。

くちなは 蛇の料理鹽梅を潜かに見たる人の語りけるは、
（應）が常住の居所なる、屋根なき褥なき郷屋敷田
畝の眞中に、鋼にて鑄たる鼎（に類す）を据ゑ、
先づ河水を汲み入ること八分目餘、用意了れば直
ちに走りて、一本榎の洞より數十條の蛇を捕へ來
り、投込むと同時に目の緻密なる箆を蓋ひ、上には
犇と大石を置き、枯草を燻べて、下より爆々と火を
焚けば、長蟲は苦悶に堪へず蜒轉廻り、遁れ出でん
と吐き出す織舌炎より紅く、箆の目より突出す頭を
握り持ちてぐツと引けば、骨は頭に附きたるまゝ、
外へ抜出づるを棄て、屍傍に堆く、湯の中に煮
えたる肉をむしやーむしや喰らへる様は、身の毛
も戦慄つばかりなりと。

（應）とは残忍なる乞丐の聚合せる一團體の名な
ることは、此一を推しても知る可きのみ。生ける犬
を屠りて鮮血を啜ること、美しく咲ける花を蹂躪す
ること、玲瓏たる月に向うて馬糞を擲つことの如き
は、言はずして知るべきのみ。

然れども此の白晝横行の惡魔は、四時恆に在る者

にはあらず。或は週を隔て、歸り、或は月をおきて來る。其去る時來る時、進退退常に頗る奇なり。

一人榎の下に立ちて、「お月様幾つ」と叫ぶ時は、幾多の（應等同音に「お十三七つ」と和して、飛禽の翹か、走獸の脚か、一躍疾走して忽ち見えず。彼堆く積める蛇の屍も、彼等將に去らむとするに際しては、穴を穿ちて盡く埋むるなり。さても清風吹きて不浄を掃へば、山野一點の妖氣をも止めず。或時は日の出づる立山の方より、或時は神通川を日没の海より溯り、榎の木蔭に會合して、お月様、と呼び、お十三、と和し、。パラリと散つて三々五々、彼杖の響く處妖氣人を襲ひ、變幻出没極りなし。

されば郷屋敷田畝は市民のために天工の公園なれども、隱然（應）が支配する所となりて、猶餅に黴菌あるごとく、薔薇に刺あるごとく、渠等が居を恣にする間は、一人も此惜むべき共樂の園に赴く者なし。其去つて暫時來らざる間を窺つて、老若爭つて散策野遊を試む。

さりながら應が影をも止めざる時だに、厭ふべき
蛇喰を思ひ出さしめて、折角の愉快も打消され、掃
愁の酒も醒むるは、各自が伴ひ行く幼き者の唱歌な
り。

草を摘みつゝ歌ふを聞けば、

拾乎、拾乎、豆拾乎、
鬼の來ぬ間に豆捨乎。

古老は眉を擧め、壯者は腕を扼し、嗚呼、兒等不
祥なり。輟めよ、輟めよ、何ぞ君が代を細石に壽か
ざる！

などと言言をおつしやるけれど、拾はにやならぬ、
いんまの間。

斯くの如く言消して更に又、

拾乎、拾乎、豆拾乎、
鬼の來ぬ間に豆拾乎。

と唱へ出す節は泣くがごとく、怨むがごとく、い
つも（應）の來りて市街を横行するに従うて、件の
童謡東西に湧き、南北に和し、言語に斷えたる不快
嫌惡の情を喚起して、市人の耳を掩はざるなし。

童話は（應）が始めて來りし稍以前より、何處よ
り傳へたりとも知らず流行せるものにして、爾來父
母姉兄が誑しつ、賺しつ制すれども、頑として少し
も肯かざりき。

都 人士もし此事を疑はゞ、請ふ直ちに來れ。上
野の汽車最後の停車場に達すれば、碓氷峠の馬車に
揺られ、再び汽車にて直江津に達し、海路一文字に
伏木に至れば、腕車十錢富山に赴き、四十物町を通
り抜けて、町盡の杜を潛らば、洋々たる大河と共に
漠々たる原野を見む。其處に長髪 敝衣の怪物を見
とめなば、寸時も早く踵を回されよ。もし幸に市
民に逢はば、進んで低聲に（應）は？ と聞け、彼
の變ずる顔色は口より先に答をなさむ。

無意無心なる幼童は天使なりとかや。げにもさき

に童謡ありてより（應）の來るに一月を措かざりし。
然るに今は此歌稀になりて、更にまた奇異なる謡は、

屋敷田畝に光る物ア何ぢや、

蟲か、螢か、螢の蟲か、

蟲でないのぢや、目の玉ぢや。

頃日至る處の辻にこの聲を聞かざるなし。

目の玉、目の玉！ 赫奕たる此の明星の持主な
る、（應）の巨魁が出現の機熟して、天公其の使者
の口を藉りて、豫め引をなすものならむか。

【完】